

## 顔とコミュニケーション

### — III 青年期と顔 —

臺 利 夫

## Face and Communication III.

### — Adolescence and Face —

Toshio Utena

Though the meaning of personality growth and the concept of biological development are different from each other, both are effectively integrated in adolescence.

A meaningful encounter with a particular person in daily life often becomes a turning point in the life of a young person. It is in adolescence that an encounter is experienced by him or her as the encounter in itself. The personal face of each partner in an encounter plays an important role in the situation. The encounter between historical figures clearly shows such a process.

There are cases where an adolescent wants to have psychological counseling about various human relations or various encounters. In counseling situations, the face of a client confronts (without intermediary object) that of a counselor. And the theme of "face" is sometimes taken up in this situation. The inner (psychological) "face to face" relation corresponds to the outer (real) "face to face" relation. Thus it is possible to say that these relations may form a system in the sense of GENERAL SYSTEM THEORY.

#### 1. 日常生活での出会い

一生を決めるようなただ一度の出会いについては、互いの言葉のやりとりだけではなく、それとともに有意義な深い体験がもたれることが注目されてきた。しかし当人の体験の有無を問えないとしても客観的に見て、その行動が急激

に変わるような出会いも無いとは言えない。例えば、老人病院で痴呆状態で、長年全く無表情・無言で臥床していた老婆が、同室者の縁者で生後6カ月の乳児が見舞いの親に抱かれて来た際、乳児の微笑に応じて笑ってあやすように一言声を発したというような場合を見出だす。

だがこの章の前段ではまず青年期の出会いに

関して考察をおこなう。その特徴はなによりもそれが青年にとってはかけがえのない体験として受けとめられるということである。出会いは青年の自我を助長させ、一人前の成人として自立させるきっかけになり、いわゆる自我同一性の確立の過程における画期的な出来事とみなされる場合がある。

自我の成長・発達という視点に併せて考えられるのは、不適応に悩む人の自我の健康面の発展を促すために人為的に構成する、心理相談あるいは心理療法的場面である。発達とは生体内部の種々の可能性が心身の発達過程で顕現することで、そこではとくに生物学的な進化の意味が含まれている。他方発展とは質的变化をともなう再体制化の過程であり、矛盾を統合し、改革や創造を志向することと一応は定義されよう。だがこれは力点の差であって両者は互いに深く関連している。例えば、青年期の出会いにおいてはしばしば人格の飛躍的發展を認めるが、心理療法の効果は青年においてとくに著しい。心理療法やカウンセリングの場は社会・歴史的な現実の生活場面とは一見異なる一種の文化的孤島であるけれども、クライアント（患者）とカウンセラー（心理療法家）の出会いがあり、しかも自我の発展状況を一層詳細に捉えることができる。この章の後段ではこうしたカウンセリングの場での出会いをとりあげる。

幼児の顔は、身体の大きさともども、互いに類似して直ぐには見分けがつかないほどである。しかし児童期を経て青年期に向かうともはや見分けられないというようなことは全くなくなる。すでに個性が形成されて顔に表れているからである。個性は素質を基盤としながらも有形・無形、意識的・無意識的な環境との相互作用：影響—被影響の関係を通じてつくられてゆく。こうした影響関係の中で児童期では家庭教育や学校教育が最も重要だが、青年期以降は個人の主体性の発展とともに社会的・文化的な場での人や物との出会いが大きな意味をもつようになる。

繰り返すが、出会いが真に出会いの意味を帯びるのは青年期においてである。単に偶然に遭遇して影響を受けたというのであれば幼児期や

児童期でも起こりうるが、当の状況を自分でしっかりと意識的に捉えて成長の糧にするようになるのは青年期をまって初めて可能になる。個性的な顔はさまざまな固有の出会いを通じて形づくられるわけだが、しかしまた顔によって出会いがつけられることにもなる。恋愛の多くがまずは若く美しい顔の持ち主に関わることはよく知られている。

昔から青年期はその後の進路を決定する人生で最も重要な時期であるとされてきた。しかし新しい門出にはまた同時にそれまで培い、保ち、慣れ親しんできたことへの訣別と喪失がある。さらに、ある学者が青年期を「夢こわしの時代」と称したように、この時期は児童期に夢見た理想的自己像が次々と崩れて自分の限界をはっきり認識しなければならぬ時でもある。だがそのことと背中合わせに自分の潜在的可能性が触発されて自己実現へと向かうのである。自己の潜在的可能性には本人がいくらか気づいているものもあれば気づかないものも含まれている。気づかない可能性も人や物やその他の文化的・社会的事柄との初めての出会いによって啓発される場合が生まれる。そこには運命的ないし偶然的な印象があるけれども青年期は全体としてそうした出会いを用意している時期であるといえよう。

上記の点から明らかなように、出会いにとって重要な要因は青年の社会的な関わりへの広がりとその人自身の自我のあり方であり、これらは相互に深く結びついている。社会的関わりにはさまざまな人や事物との出会いがあるし、学校の教師や先輩やカウンセラーとの関わりもそうした出会いの一つになるが、進路を決定するような人との出会いは一見偶然であっても実はその素地が十分に整えられていることがある。つまり当の出会いが以前より本人が密かに求め、望んでいた目標を一層はっきりさせるようにはたらくのである。

世の中には幼児期から玩具の電車が大好きで、中学・高校生の時も鉄道愛好会に属し、大学では工学部で鉄道のエンジンの研究をその道の権威の教授の下で行ない、やがて鉄道会社に就職したというような、早くから目標が決まり一途

に進んでそれを獲得する、幸せな人も見出させる。だが本人がいかに求めているも他の条件が整わないとこうした出会いとキャリアは生まれない。本人の願望を支え、培う社会的・文化的環境と本人の側の心理的・生理的条件が整備された時にはじめて出会いは成り立つのである。スポーツマンになるのを望んでいる少年をはじめとして音楽家を志す少年においても、明瞭で実的な目的意識はむろんのこと年齢や体力・気力の上でも、さらにはそのひたむきな態度と表情においても、出会った先輩や指導者との間で触れ合うものがなければならない。むろん出会いの相手は友達 — 優れた親友やあるいは逆に問題を抱えた学友であってもよい。親友の場合は深い交際があり、互いに学び合いがある。だが交わりはなかったが同級生に非行児がいたという体験から矯正施設の職員を志した青年もいる。実際、相手からの反応が期待されなくても本人を成長させる出会いは数多く見出させる。しかしお互いの心理的交流に基づいて互いに新たな出立がなされるなら、これはとくに実りある出会いといえる。

教師との出会いは青年にとって一層価値ある結果をもたらす。とくに教育者を志す青年がしばしば中学や高校での敬愛する教師との出会いに動機づけられているのを認める。ある学生は高校である先生に強い影響を受けた。「この先生は入学当時はむしろキメの細かい人と感じられたが、学年が上がるにつれて大胆な男と見えるようになった。先生は細かい気配りと決断力を合せ持つような人物で生徒を引きつけて、時にはグイグイ指導した。自分の先生への評価が変わった。凄いなという感じだった。自分は将来教職を希望しているが、あの先生の力が大きいと思っている」と言う。

偉大な教師との出会いがある青年に新しい進路を与えたという話は、既に記した本居宣長と賀茂真淵の間柄のみでなく歴史を顧みると数多く見出すことができる。だが歴史上の話に限らずわれわれの身の回りにもこうした出会いは生じており、同時代の先輩や顔見知りの年長者の話からもそうした体験を聞いたり、読んだりする場合が時々ある。以下はかつての家庭裁判

所判事で著者も仕事上関係したことのある森田宗一氏の話（1964）を軸に出会いの問題を振り返ったものである。話に登場するのは過去の歴史的な人物であるけれども、森田氏の話は一つの出会いが次の出会いを、さらにまた次の出会いを生んでゆく過程を明らかにして、同時に過去から現在への人と時代のつながりをも示唆して興味深い。

Nという少年がいた。わがまま一杯に育てられ、忍耐力がなく怠けづせがついて高校在学中に家出して非行に走った。森田氏は父母と面接し本人の態度・性格を判断し、さらに観察を続けながら指導を継続するように、武蔵野の林を切りひらいて設けられた家庭的な補導施設へ委託した。数カ月経って森田氏がこの施設を訪れてみると彼の心情は一変し、態度も変わり、顔つきとまなざしも変わったように見えた。面接してなにを学んだかと質問すると規則正しい生活と慣れぬ農耕を通じて忍耐力と責任感と頑張りを学び、やり抜けば気持ちがいよくなったという答えがかえってきた。Nが作業そのもの以上に生の根本的態度を学んだことがわかった。いろいろと調査を積んだ後においても少年を家庭から切り離して施設に送ることは判事としては決断を要する事態である。だが施設送致の前後に、また在所中にも話し合いを重ね、関わりを持ち続けたことで、森田氏と少年の間には親との間に無かった人間的交流が生まれ、辛い施設経験を有意義なものとして受け取らせたのではなかったか。そして両親も自分たちの誤った育て方を話し合い中で反省しているのである。この話を超えて少年とその親と森田氏の出会いを感得することができる。

森田氏はキリスト教徒であるが旧制の第一高等学校に在学中に大きな転機を迎えた。これは年末の街頭での社会禍の募金で知られる救世軍の日本での創始者 — 山室軍平との出会いであった。森田氏は山室から大きな教訓を受けてキリスト教徒としての道を進みつつ併せて更生福祉の面に関わることになる。彼が選んだ家庭裁判所判事の道はその現れであったろう。

山室は20歳の頃に同志社大学に学び、同大学の創立者である新島 謙と出会う。新島は幕末

に渡米した後、日本でキリスト教教育を実践したが、顔写真を見るとまなざし鋭く、かつ端麗な風貌である。他方、山室はひときわ背が高く、色白で柔和な顔であったようだが、この青年が晩年の新島の目にとまり、短い期間ながら両者の間で深い交流が行われたという。因みに壮年期の森田氏は四角い顔立ちで太い眉が印象的であった。この話を顧みると新島 譲、山室軍平、森田宗一そしてN少年、こうした青年期のフェース ツー フェースの関係がまさに出会いであり、それが大なり小なり歴史をつくっているのである。

ある人物との出会いは出会う側の個人史の中で捉えると確かに青年期こそ重要である。だが社会史としてみるなら、出会う側の年代についても顧みなければならない。山室軍平も賀茂真淵もかの出会いの際の年齢は老成の時代であった。彼らのように高齢でも出会う側がず抜けて鋭い“感受性”を持つ場合は別として、多くの場合は出会う側も体力・気力・能力・経験がともに揃った、壮年期にある時こそ鋭い青年との出会いを意味あるものにすると考えられる。老名誉教授の葬式に列席して、かつての弟子として代表で弔辞を読んだ中年の教師は「私は先生の最も充実した40代の時に出会えたということを真に幸せと思っています」と述べ、また80歳を過ぎた元高校教師は同窓会で「私が5番目に40歳代で勤めたみなさんの高校は、最も充実した体験をもてた忘れ難い、素晴らしいところでした」と挨拶した。出会いは単に青年のみならず、出会う側も含めた相互のものであることが注目される。なお言うまでもないが、このことは3人以上の集団的な出会いの場合も妥当する。労働争議が頻発した時代、ある会社で組合の委員長として華々しく活躍した男が7年後に再び委員長に選ばれた際に「あの時代、あの仲間の共に組合事務所を固めて戦えたからこそ委員長役が果たせたのだ。今は状況がまったく違う。もう私が出る幕ではない」と述べて辞退した話がある。

さて前述の“感受性”つまり他者との交流の過程での鋭く、広く人間を見る目は前述の偉人ではずば抜けていたが程度の違いはあれ、すべての有意義な出会いにおいて多少とも潜在して

いる。人を見る目は一定の発達段階にならないと現れない。そしてこれが熟してくると、出生以来毎日見て、馴染んできた父親や母親さえも見直して、良さ、素晴らしさを再発見することになる。ここに至って青年は親と出会ったのである。子どもの頃は嫌がっていた家業を継ぐ決意をする若者が出てくるのも、あらためての親との出会いとも言えるだろう。むろん牧師の息子が軍人になり、政治家の息子が画家になるのは反感をもたれた教師が反面教師として受けとられ、学ばれる場合と同様である。だがいずれにせよ子は青年期の自我の成長とともに親に会いなおすと言えるだろう。

人を見る目はどのように養われるのであろうか。その大きな要因は教育が担っている。当人の教養はその人をさらに高めるような他人との出会いを準備するであろう。学校教育のみならず家庭教育と生育過程における社会的・文化的環境の影響は重大である。今日、学校教育は高校でも大学でも教養課程をないがしろにする傾向がある。個性重視のうたい文句の下に早々とスペシャリストをつくり出そうとするわけだから、幅広い教養は不必要ということだろうか。こうして出来上がる人はある面では抜群に優れているがほとんど特殊機械と変わりがない。彼らは自ら発展し、社会化し、自ら組織をつくり出す能力を僅かしかもたない。周囲の変化に応じて弾力的に対処することはむずかしいし、他人からの刺激を受けて自分を豊かにすることも少ないので、出会いに関心をもたない。この点では、性格的に偏った、著しく我の強い人も同様である。彼等は強いプライドをもっており他人から受け取るものはないと信じている。指導者や年長者を敬わず友達も愛さないから交際は少ないが意にかけない。外部からの注意もほとんど聞きいれずに自分勝手に動いているから出会いの意味もわからない。

他方、なにごととも浅く広くこなすマルチ人間がより優れているというのではない。社会が不安定で複雑化する中では彼もそれなりの価値を認められるだろう。だが世の中が落ち着いてくると要領の良さだけで生きている人には限界がくる。人間の発展には本質を見抜く深い洞察が

不可欠だが彼等は人にも物にも注意を集中せず、決して物事の本質に触れることがない。マルチ人間と関連すると思うが、幼児期からファミコン、ラジカセ、テレビなどに年がら年中へばりついている子どもが多い。中には野山をハイキングしている最中でもイヤフォーンで、大音量で音楽を聞き通しの少年もいる。彼らは周囲の状況や環境を落ち着いて観察することもなし、人とも自然とも心からの交流をもたない。自己の周囲の人や物や事態は彼にとっては単にその時々目的の道具でしかない。そして一時的な見かけの顔や表情に対する印象でついたり離れたりする。彼らは一見明朗で調子よく社交的だが、何時もなにかやっていないと不安であり、真の出会いを体験することははなはだ難しいといわねばならない。

この人達がやたらと社交的に振る舞うのは半面の孤独を示唆しているともいえる。だが彼らは孤独にどれだけ面と向かってきただろうか。青年は子どもでも大人でもなく、所属する集団がなくて基本的に孤独であるとみられてきた。だが孤独は出会いを生む土壌である。孤独の苦しみの中で出会う人間において素晴らしさを発見する。ある人の素晴らしさや魅力はつまるところそれを見て取れる人との関係の素晴らしさ、出会いの素晴らしさなのだ。しかし孤独な人はまた出会いを引き寄せる人でもある。ムスタカス (Moustakas, 1961) の言うように、孤独においてこそ他人への思いやりや深く広い愛が可能になる。これは青年期の孤独を超える、人間全体の孤独の課題である。だがすべての人間が実は内面に孤独を抱いているという、そのことへの共感が態度と行為に滲み出て他人を引きつけ、他人から慕われ、愛されるようになる。その意味からすれば孤独な人は決して孤独ではない。孤独な人が孤独なのは当人が孤独に溺れ、自虐的になっているためである。

孤独から社交過剰や活動過剰になるのはまた自我同一性の拡散という視点からも捉えることができるだろう。従来から青年心理学では自我同一性について多くのことが語られてきた。自我同一性は従来から二つの側面で注意されている。一つは人のパーソナリティの立場からみた

人と環境の関係であり、他の一つは環境それ自体の在りようで、その両者は相互に関連している。自我同一性の確立のためには本来ある程度の社会の安定と統合 — 社会的同一性が必要なわけである。こうして個人の自我形成とその人が接する社会の形成は不可分な関係を保ちながら進展するのである。ここでいう環境とは自然的・物理的なものはむろんのことそれと密接に結びついた社会的・人間的環境でもあるから、自我同一性の形成過程では多くの出会いが体験されるということが出来る。このような出会いには運命的な要因もはたらくが、同時に青年の自発性あるいは勇気や冒険心も大きな要因になりうる。実際、こうした冒険は心理的にも社会的にもとくに青年に許されたものであり、この機会を除けば二度とこないようなものもある。学生は自分の大学の指導教官以外の先輩や知識人のところでもあえて訪ねて教えを請うことができるし、恋する女性にあえて近づき、交際を求め、愛を告白することもできる。そのようなヴァイタリティと社会的是認を担っているのである。それに加えて、堅固な目的志向が重要である。多くの障害をのり超えて自分の目標に接近しようとする努力はその人に大きな自信を与える。このような人の場合にはまさに自ら同一性を獲得することができたのである。自分の過去を反省し、自己の深層の無意識の動機を洞察するのも時には問題解決を促すが、多くの青年にとっては過去を振り返るよりも現在を大切に、未来の目的に向かって邁進することこそ健康な生き方と言えらるだろう。そうした前進の過程に多くの出会いが待ち受けている。

## 2. カウンセリング場面での出会い

ある学生は高校時代より自然科学者を志し、指導を受けたい教授のいる一流大学であるJ大学を受験したが落ち、さらに二度受けても通らず、ついに三年目に落ちた時に諦めて本人が三流というL大学に入った。しかしその大学には二年生になってもなじみず、不快なまま通学していたがどうにも我慢できないということで学生相談所を訪れた。ここでの彼の話によると、今の大学は校門も校舎も教授の顔までが自分の志望

した大学のそれに似ているように見えるが、そのことがますます今の学校への嫌気になっていて、止めて再受験しようかとも思っているということだった。だが一年余りのカウンセリングの後、彼は再受験をせずにこの大学でとにかく卒業するまではやるということになった。そしてやがて大学院に進み、助手に選ばれた。その頃再度会う機会を得たカウンセラーに向かって、彼は次のようなことを話した。「三年生になった時、自分がどうしても落ちた大学に行けないならば今の大学で勉強に励んで、この大学の最高の先生から最高の知識を得てトップになりたいと思ったのです」と。

この学生については三つの点が注目される、第一は、衝動的に退学せずにあえて相談室の扉を叩いたことである。この構えそのものが既に彼の転身の可能性の6割を保証していた。第二は、カウンセラーとの出会いとそれと平行して優れた教授と出会ったこと。そして第三に、この大学を自らの中へ取り込んで、大学と同一化することで希望した大学への対抗心をもって、自らの誇りをもとり戻したことである。精神分析学説を借りていうと、これは息子が敵意を感じる父親と同一化して父親を克服するのに似ていなくもない。またこの話において、門構えや校舎から教授の顔にまで憧れながら入れなかった希望校と似ていると言うのは顔と出会いの関係を示唆しているように聞こえる。

だがこの点を自我同一性の形成の視点から見ると、L大学との出会い、そしてカウンセラーとの出会いが本人を自立させ、同時にかつての自分を超越ることができたこと…ある意味でこれは新たな自分との出会いであったともいえる。そしてそれによって同時に本人が固執した、本人のイメージ上のJ大学をも超越ることができたのである。

カウンセリングとは、一般的な見解によれば、社会生活中に適応上の問題に遭遇して援助を求めてくる人(クライアント)に対して、面接相談の訓練を受けて助力者としての資質および資格を有する専門家(カウンセラー)が問題解決のための支援をする過程とされている。援助の方法 — 技法の種類はさまざまで、問題を解明

してみせて説得・忠告・激励する指示的な方法や過去の体験を重視する精神分析的な方法あるいは段階的に目標に向かって処理法を学習させる行動論的なやり方やかつて非指示的方法と呼ばれたクライアント中心法などがある。これらの中の特定技法の極端な信奉者からは許されまいが、以下には、現在のいずれの技法も基礎に思われる、カウンセラーとクライアントの関係をとりあげてみる。

カウンセリングの初期の段階で最も重要なのはクライアントがカウンセラーとともにカウンセリングとはなにか — 今、なにが進行しているかを理解するようになることであり、これが場面構成である。場面構成にはまずカウンセラーが主導的に関わるけれども、クライアントの協力なしには成り立たない。例えば、カウンセラーはクライアントの言葉に耳を傾けてクライアントを解ろうとするのだが、その解ろうとしていることがクライアント側に解ることが、またクライアントが解ったということがカウンセラー側に解ることが必要である。これは相互理解のために両者がまさにその場で心理的に関わり合う過程である。そしてこのような過程はクライアントにとってはかつてない体験であり、このように懸命に理解に努めてくれる人(カウンセラー)とは今まで出会ったことがないと感じるのである。このカウンセラーに支えられながらクライアントは自らをあらためて理解するようになり、自分が今なにをなすべきかに目覚め、意欲的に自ら解決する道程を進んでゆくようになる。

カウンセリングにおいてはクライアントの有意義な体験が不可欠である。それは現在(カウンセリング)の場の体験に限らない。クライアントが過去の事柄について語っていても、その体験は今・ここでの体験に重ね合わされていることが注目される。過去の体験といっても今、特定の過去がとりあげられているのだし、過去を話している今の体験に彩られているからである。だがその点においても、体験こそ現在と過去をつなぎ統合するものといえる。単に誰と出会ったとか、どんな出来事があったとかいう事実だけをとり上げればつまりは事実があっただけだ。それを歴史にしているのは、個人的

であると社会的であるとを問わず、事実に伴う体験の積み重ねがあるからである。それゆえカウンセリングにおいてはクライアントが事実を列挙するとそれがどう体験されたかを常に問題にすべきである。ここには過去から現在へと、歴史の流れの中で生きている人間に最大の注意を払う関係が作り出されているといえるだろう。

既に述べたようにカウンセリングにおける体験は相互理解の過程に深く関わる。だが理解の過程が単に技術操作的に進められることは実際上ありえないし、この面だけをとりまニュアル化して学習するのは困難である。なぜなら相互理解は特定の人格をもったクライアントとカウンセラーの間で生じることだからである。言い換えれば、それは人格と人格の触れ合いがあり、過程の発展とともに互いの人格への信頼と尊敬が深まる過程であるからだ。クライアントにとって初めての出会いであるようにカウンセラーにとってもその人を「この一回限りの苦悩する人間として知ること」(Trüb, 1951)であって、今を以ては会えない、かけがえのない一回の出会いなのである。カウンセラーは自らに対して「自分はこのクライアントにとってなんであるか」と問うことでクライアントの人間として受容される体験を深め、真に内面からの開示を促すようになる。

クライアントには言うまでもなくさまざまな種類の人々がいる。中でも社会で対人関係で不適応に陥っている人がカウンセリングを求めて数多く来談する。ある者は他人との交際で絶えず傷ついていて、人前に顔を出すのに大きな抵抗を感じている。ある場合には自分では顔のない人のように(実際、他人と会う際に黒眼鏡をかけた、極端に厚化粧したり、酒に酔ったりして)振る舞うこともある。彼は他人に対して不信任をもつのみでなく自分に対しても自信を喪失している。人は出会いによって自分を確認し拡げてゆけるのであるが、このような人は他人や新しい状況に出会うために、大冒険とでもいえる大きな勇気が要るわけであり、またそうした冒険はできないのが通例である。したがってかく引き籠もりがちで、カウンセラーのと

ころへ来るということだけでもたいへんな事柄である。この構えをカウンセラー側は十分に受けとめて対応しなければならず、一回限りの出会いということの意味は哲学的であるよりはるかに現実的な心理事象なのである。

非行少年や登校拒否児の場合は本人自身ですすんで相談を求めて教育相談室などに現れることはほとんど無いと言ってよい。もし来談するならば、そのことでこのケースの発展はほぼ可能であるとさえ言いうるであろう。その少年が自分の抱える問題を多少とも意識し、解決への意欲と援助への希望を示唆している事柄だからである。非行少年ほどではないにしても、高校生年齢のいくらか不適応な青年が来談することもごく少ない。彼等も自分なりに悩んでいるのであるが他人に向かってそのことを表明するには大きな抵抗感をもっているからである。仮りに面談に入っても初めは沈黙がちで、顔も上げずに「別に」とか「わかんない」と答えることがほとんどである。しかしカウンセラーの丁寧で粘り強い話しかけによって徐々に心を開き、対話が可能になることがある。さらに次のようなケースもある。

A (男、18歳)は専修学校の生徒である。教室内で騒ぐ、カンニングをするなどの問題行為がある。親と教師の見るところでは軽率、短気で何時もむしゃくしゃしている。世話好きで正義感が強い。友達は少ない。このケースはカウンセラーと25回面接を重ねたが、9回目の面接では次のように語っている。自分は家族と話し合うのは恥ずかしいが半面学校では喋りまくり、他人を笑わせたりして大いに騒ぐ。しかし少数の友達とはむしろ真面目な話をする。周囲の人々は変わってると見ているようだが自分ではとくに変わってわけではないと思う。だが学校で頭髪に金粉を塗り付けて歩いてみたことがある。教師にそれは不良のやることだから止めると叱られたが一日中これで通した。

カウンセラーはまず少年自身に自分の像をありのままに捉えるように援助するとともにその像と社会が求めている像とのギャップを自分なりにどのように埋めてゆくかを一緒に考えることを促した。少年はカウンセラーとのやりとり

を通じて社会への安堵感と信頼を少しずつ増大し、また自信も漸次に強めることができた。その後卒業して職場で働くようになってからは一層積極的に、大きな問題もなく生活するようになっていった。これは不安定なゆえに大袈裟にきどった姿を顕示していたAが、カウンセラーの出会いに基づいて自分自身との出会いへと進んでいった過程とみれるだろう。

カウンセリングがクライアントに未経験の人格の触れ合いを提供する場であるという点はいかほど強調してもし過ぎるようなことはないだろう。極端な場合にはカウンセリング技法そのものはいたって未熟な初心者のカウンセラーも、もしクライアントと深く心が触れ合うならある程度クライアント側の心理的展開と課題解決がなされるようなことも起こる。クライアントにとってカウンセラーの人格はまず受け面接でのその表情や姿勢において捉えられるだろう。いわゆるウマが合う・合わないが、顔を見合ったとたんにある程度決められる。これはカウンセラー側からも言えることであり、互いの顔合わせはそれなりに重要である。実際、受け面接限りで来談しなくなるケースが著しく多い反面、初回で人格的接触を得た場合には継続的面接が可能となり、その7割は成功例であるという。むしろウマが合うか否かには偶然の要因がはたらくから、継続的な面接を行うためにはベテランのカウンセラーの指導の下に状況の分析と反省がなされる必要がある。

ところで前の例を顧みると、A少年も決して家族嫌い、人間嫌いなのではなくてむしろ大人たちから愛され理解されたいと願っているにもかかわらず、うまく近づけないでいるという点が注意される。そこで比較的保護された場での集団関係がつけられればAもさらに積極的に社会との接触を広げるのではないか。むしろAのように状況によって態度が変わる人見知りではなくて一層深刻な対人恐怖の人も多いけれども、それぞれの型の人々でグループをつくり、個人カウンセリングの場合と同様、ありのままの人格を受容し、ともに自由に発言できる雰囲気育ててゆくなら、仲間同志の関わり体験に支えられながら個人カウンセリングの場とはいく

らか異なる形で心理的にも社会的にも人格発展に有効にはたらくことがある。引き籠もりがちの人には、一見グループの出席は非常な負担を与えるようであるが、やがて自発的参加に変わればグループに入ることができたという自信につながり、かえって有効に機能することもある。

グループアプローチには精神科領域での心理治療的集団から不適応者へのカウンセリンググループ、さらには一般社会人のための心の健康の維持と増進を目指すエンカウンターグループ、青少年の人格的成長を促す開発的グループ、社会福祉的ワークグループなど種々の形態が見出される。ここでも仲間のメンバーとの出会いは各自の抱えた課題の解決に決定的な役割を果たす。エンカウンターグループにおいてはメンバーは自分を防衛するために身につけているものや見せかけの部分を取り去ってもよいとの安全感をもつ。このようになると人は他のメンバーとの間に、感情を基盤としたより一層直接的な感化を結ぶようになる。これが基本的な出会い（エンカウンター）の状態であるとロージャズは言う。他方、外側から見たグループアプローチの特徴は、あるメンバーの話で始まったある課題の流れが他のメンバーのたまたまの発言によって飛躍的に発展したり、別の方向に進んだり、初めの主張がひとりだけで反省され、変えられたりするところにある。これは個人カウンセリングにおけるカウンセラーとの一対一の間柄と違ってさまざまな意見が自由に飛び交う中で突然に起こるのである。グループは一つの小社会として一層出会いの体験を鮮明にするものといえるだろう。

開発的グループアプローチの一場面をあげよう。これは大学生のグループでのやりとりであるが、話し合いのむずかしさという課題でA少年の場合と似た点がある。ある女子学生が「この大学ではみんなが閉鎖的で孤立していて話し合いがない」と口を切った。またある男子学生は「話すには話すすが表面的なことしか会話をされない、ただ一対一の場合にはほんねも出る」と言う。そこで突然、アメリカ留学帰りの男子学生が「ふだん軽い話しかしないからかえって一人一人になると孤独が深まる」と述べた。「毎



日毎日平凡に過ごしているうちにそれが積み重なって重い意味をもってくる」とも彼は言った。つまり、表面上は軽口で賑わしている者もこうした話では済まされない問題を抱えているのだというわけである。すると最初の女子学生は「くだらないと思える会話の中だって大事なことがある気がします」とやや初めの言葉とはニュアンスの違うことを言う。そうすると別の男子が「クラブなどで一晩中話し合うこともあるし、そうしたことが続くと、敢えて自分一人になりたいなぁと思う時があるんだ」と応じた。それについては最初の発言者もそれはその通りであると答えている。そこでまた別の学生が「問題の相違によって話し合う人がそれぞれ違う」というと先のアメリカ帰りの学生が「話すだけでなく質ねてあげることも役に立つ…アメリカ人はよく『お前の顔、なんとなくブルーみたいだけど一体どうなんだ』とかきいてくれた。それで救われたこともあった。むろんよく知らない人に『なんか顔色悪いけどどうしたか』なんて言えないけど…」と言う。すると、あの口火を切った女子学生が「私もそういう考え方なので、そういう考えもってる人がいて嬉しい」と語ったのである。この簡単な描写によってグループでのやりとりの（話があちこち飛躍しながらも漸次に方向性をもってゆく）特徴と話の意味の深まりと提題者自身の心理的变化が読みとれるであろう。グループメンバーは互いにカウンセラーになってゆき、他の場面では得難い出会いを互いに体験するのである。

しかし上の話にもあるように互いの関係の深まりは相手の発言のみに基づくのではない。相手の顔色など非言語的なサインが相手からのコンタクトの要求であることに気づかねばならない。言葉とともに身振りや表情が現れて、訴えられてくるし、言葉なしでも、肩を落とし、頭を垂れ、まなざしが虚ろになれば疲労感が顕わにされるように、身体言語としてのサインが内的な心情をかなりの程度周囲に伝える。相手を理解しようとする構えが相手の発するあらゆるサインに注意を配るようにさせるのである。

実際、円座を組んでの討論集団における実験結果 (Baker, 1984) が示すように、隣り合っ

てよく見えない同士より互いに姿や顔が十分に見える間柄の方が初めての段階から活発な相互作用があり、集団活動への参加度も大きいのである。しかしホール (Hall 1966) によると、病院の病室で長方形のテーブルを隔てての患者間の談話についての観察によるとテーブルの角を挟んで座った者の間でのやりとりは、同じ側に並んだりテーブルを隔てた人々の間よりはるかに多かった。ほどよい間隔を保ちながら風貌をはっきりと互に見えるということは集団のコミュニケーションには必要な条件になっているといえよう。だがこのことはまた、コミュニケーションでは互いの顔や姿をなんらかのやり方で明示することが話のやりとりを活発にする手だてであることを裏書きしている。グループアプローチでは言語で表現しにくい場合には身振りで表すことが促されるし、時にはロールプレイングやそれに準じる形のやりとりを全員に勧めることもある。

身体活動と心情と言語の関連は本来極めて強い。すでに触れたように、他人と面と向かえば相手からなにかが伝えられるのが期待されるだけでなく、自分がどう振る舞い、なにを喋るべきか、あるいは喋ってはいけないかを気づかせる。こうしたところから不安を感じる人もいて、電話カウンセリングは相手の顔を見ないで気がねなく話し合えるところが最大の利点とされている。しかし半面相手の微妙な反応はとらえられないし、頻繁なフィードバックもできないので、舌足らずな言い方や一言余計なことを言ってしまうこともある。他方、グループアプローチでは忌憚なく気持ちを表してよい場がつけられているとはいえ、やはり多くの人の前では抵抗を感じて言い辛い場合もある。そこで課題提供者や主役の人があたかもその場から外へ出ていってしまったように参加者一同でイメージして、課題提供者や主役に後ろ向きになってもらって（顔を見せないようにしてもらって）本人の独白と交互に背後のメンバーたちがその人について語るというやり方がある。これは背面技法 (ビハインドザバックテクニック) と言われている。この場合、現実には課題提供者は自分への批判もその場で聞いているわけで、いわばいっ

そう自己を客観視する機会を与えられるのである。この後で再び主役を含めた討論が行われるのが通例である。だが、非言語的コミュニケーションを促す、種々の身振りもそのものとしての意味よりもそうした行為によって場が転換して、主役も他の参加者も新しい体験を獲得し、それまでの体験を深めるようになってところに意義があるということである。しかもそうした体験が他人と分ちもたれるところに心理的な交流がなされ、有意義な出会いが現れるのである。

この章では、青年期の日常生活場面での出会いおよびカウンセリング、グループアプローチの場面での出会いにおける顔の諸問題について述べてきた。顧みると、森田氏の場合のような、それ自体歴史的・社会的場面に表される顔とカウンセリング場面で合わされる顔は共通の特徴的体験をもっているようである。しかもカウンセリングの過程の中に“顔”の話題がしばしばとり上げられていることが注目されよう。これは単に顔の重疊的なつながりを意味するわけではない。顔が語られる場の構造が大切なのである。たとえば、既述の留学帰りの学生の場合、外国で孤立した立場にあって、外国人からの意

外な思いやりが「おまえの顔、なんとなくブルーみたいけど…」に象徴化されている。それはまさに人間関係がとくに貴重な場であり、こうした場がカウンセリングにおいても、社会生活においても相い同じく生起して、有意味に連関するのであるといえる。

## 引用文献

Baker, P. B.: Seeing is behaving visibility and perception in small group. *Environment and Behavior*, 16(2)158-184. 1984.

E. T. ホール 日高敏隆他訳：かくれた次元みずず書房 1970 (Hall, E. T.: *The hidden dimension*. Doubleday, 1966)

森田宗一：転機とは何か (望月 衛編：現代の青少年2 転機 誠信書房 1964)

C. E. ムスターカス 吉永和子他訳：孤独 岩崎学術双書 1972 (Moustakas, C. E.: *Loneliness*. Prentice Hall, 1961)

H. トリューブ 宮本忠雄他訳：出会いによる精神療法 金剛出版 1982 (Trüb, H.: *Heilung aus der begegnung*. Ernst Klatt, 1951)